

共同研究 ● 資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から（2014-2017 年度）

共同研究プロジェクトの進行状況

本プロジェクトは、多民族国家・中国における「歴史」の資源化をめぐる、南部地域の諸民族を対象にしつつ、その動的な過程や多様な展開のかたちを比較検討することを目的としている。2015 年度は 3 回の共同研究会を開催し、2014 年度に引き続き、(1) 記録・記憶、(2) 神話・伝承、(3) 史跡・景観、(4) アイデンティティの問題視角から、個々の事例の分析と理論的枠組みの構築に向けた共同討議を行った。

第 1 回には、長谷千代子（九州大学）「歴史の資源化と利用目的：雲南省徳宏州の『果占壁（コーチャンピ）王国』論をめぐる」、曾士才（法政大学）「伝統儀礼の観光資源化と地元住民の意識——ミャオ族の鼓社節を事例に」が報告された。長谷は、ミャンマーのシャン州から北部タイ、ラオスなどにおいて勢力を誇ったとされるタイ系民族の盆地国家の 1 つ、「果占壁王国」について、徳宏地域のタイ族の歴史意識や歴史叙述の問題に焦点をあて、民族エリートや知識人からなる学術団体が自集団の歴史的過去をいかに表象したか、どのような思惑を背景にしていたか、それらは国家側の歴史認識とどのような齟齬や問題を生み出したかなどを吟味した。

これに対し、曾は、民族起源・創世神話に基づく宗教儀礼であり、祖先祭祀としての意味合いも帯びるミャオ族の鼓社節について、貴州省で実施してきた継続的な現地調査と参与観察に基づき、儀礼過程を仔細に分析し、祭祀儀礼を通じて顕現する「歴史」の資源化の問題を扱った。儀礼的空間や儀礼的行為、身体的所作に関して広義の歴史表象としてアプローチすることが可能であり、それらがミャオ族の「歴史」における始源の時間や空間の儀礼的再現を含意する点や、観光化の影響や資源活用の現状を論じた。

第 2 回には、松岡正子（愛知大学）「蘇る？ 青蔵高原東部の古碣——再生産される記憶」、楊海英（静岡大学）「チンギス・ハーンは誰の英雄？——『中華民族の文化資源』と化すモンゴ



都市空間を特色づける大型彫塑。古代の漢籍に記された哀牢国の九隆神話に基づく（2012 年 8 月 29 日、中国、保山市）。



公共広場に造られたジンポー（景頗）族の祭祀儀礼施設（2012 年 3 月 25 日、中国、瑞麗市）。

ルの歴史と文化」が報告された。「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」（2015-2017 年度、研究代表：塚田誠之）との合同形式による研究会でもあった。松岡は、四川省を中心に居住するチャン（羌）族の碉楼（古碉）と呼ばれるエスニックシンボルとしての意味を持つ建造物がいかなる歴史的記憶と関係し、家族・親族などの存続や民族的アイデンティティの保持に関わっているかについて、現地調査で得た諸事例を比較分析した。この地域に甚大な被害をもたらした四川大地震（2008 年 5 月）は碉楼の文化遺産としての歴史的価値を高めることにつながったが、地震後の復興状況や観光資源化の現状も紹介された。

楊は、チンギス・ハーン祭祀の変容を取り上げ、社会主義革命や民族政策の中でチンギス・ハーンに対する評価や祭祀儀礼がどのように変遷してきたかを検討した。チンギス・ハーンが中華民族の歴史資源として表象されるに至っている今日の状況を現代史や国際関係の変遷を踏まえて再解釈を試みる一方、モンゴル史との関わりでも資源化されている様子やその戦略的活用、政治的狙いなどを論じた。モンゴル人社会の内部と外部、あるいは中国とそれ以外の国家・地域では、「歴史」の資源化のあり方においてかなり差異がある点を明らかにした。

第 3 回には、兼重努（滋賀医科大学）「民族の歴史を書く——侗族簡史から侗族通史へ」、河合洋尚（国立民族学博物館）「客家地域における歴史の資源化と景観形成——寧化石壁を中心として」が報告された。兼重は、中華人民共和国の成立後、少数民族に認定されたトン（侗）族の事例をもとに、トン族の「歴史」は誰によって、いかに書かれたかを検討した。そして、中華人民共和国の成立後に実施された、少数民族の歴史を書くという作業にどのような特徴があり、それは誰にとつての資源化なのかという視点からの比較研究の重要性に言及した。

河合は、漢族の下位集団である客家の状況について、客家の祖地として知られる福建省寧化県の石壁地区での現地調査を踏まえ、「歴史」の資源化との関連で整理した。すなわち、寧化は客家の象徴的空間としての地位を獲得し、彼らのアイデンティティやルーツの参照点として、また「客家の故郷」の中心地の1つとして、中国社会で認識されるようになっていく。その要因について中国の内外の政治経済的状况を分析し、客家らしい景観の創出には、国内ばかりでなく、海外の客家社会における事情も関係している点などを論じ、「歴史」の資源化に作用する力学や経済的要因の存在を指摘した。

「歴史」の叙述と資源化

歴史には「出来事（事実）」としての「歴史」と、「物語（ナラティブ）」として記述される「歴史」とが含まれ、両者は密接な関係にある。したがって、研究者の立場や関心の違いによって、「歴史」をめぐる議論は時に錯綜し、論点が拡散してしまう傾向がある。比較を通じて、過去の集会的、歴史的記憶が現在どのように表象され、活用／運用されているのか、文脈が変化する状況においていかなる読み替えや再解釈が起きているのかなど、「歴史」の資源化のメカニズムを明らかにする上で、個別性を踏まえた比較分析がポイントであるという共通の理解が得られたことは有意義であった。

そうした中で、とくに議論が集中したトピックは「歴史を書く」という課題、すなわち歴史叙述に関してである。歴史叙述とは、特定の歴史的素材に対して、書き手となる主体が利益や目的、観点に沿って、特定の人物やその行為、出来事などの中から重要と思われる素材を取捨選択し、物語（ナラティブ）として組み立てていく構築的な作業である。その際、書く側の主体と書かれる対象の間には、想像力の駆動も含め、機能や属性を異にする、様々な力が作用し、複雑な磁場が形成されるのである。

「歴史」の媒体とアイデンティティ

中国南部の諸民族に即して言えば、主として漢字による記録の歴史がある一方で、歴史的記憶の媒体は非文字のテキストの方が圧倒的に多く、しかも多様な様式と形態がある。また、「歴史」の資源化とアイデンティティの関係は動的で可塑的である。それは、境界づけられた自己の内部における価値づけとは反し、外部からは負の評価を受けている状況もあり得る。歴史上の人物や出来事をめぐる解釈では、同意・承認、改編・改作、追加・加筆、削除・棄却といった複雑な取捨選択の力学が、書く主体が重層化し複数化する中で展開する。したがって、こうした動的な過程に焦点を合わせることによって、公式・正統の「歴史」の創出のメカニズムが明

らかになることが期待される。

中国では近年、物質／非物質を問わず、文化遺産の保護・保存が重視され、各地における集会的／歴史的記憶を記録するプロジェクトが展開されている。記憶の記録化には、科学技術の著しい発展が加わり、記録は量的にも質的にも大きく変化した。それにともない、従来の記憶と記録との間の境界は変容し、相互に交錯しあう状況が生まれている。様々なレベルの記憶を掘り起こしていく作業は今後も重要だが、歴史資源のデジタル化やアーカイブをめぐる問題領域と接合させた事例分析が今後必要になるとと思われる。

今後の課題

多民族国家・中国において、書かれつつある諸民族の「歴史」は多かれ少なかれ、上述したようなポリテクスの産物であると見なしうるならば、「歴史を書く」という作業は政治性を内包していると言えよう。そして、まさにこの点が「中華民族」の復興という今日の中国が抱える国家的課題とつながっていくのである。

歴史の価値あるいはその資源性は、国家というナショナルな境界を有する特定の全体社会の文脈を基盤としつつも、その外部の社会も含めた歴史の消費者との関係性の中から、その都度生じてくるように思われる。しかも、歴史を消費する人びとは当該のコミュニティや社会集団、民族だけでは限らない。観光化を契

機として資源化される少数民族の「歴史」の場合、それを資源として活用／運用し、商品化につなげて利益を追求する人びとはむしろ外部者である。

中国という全体社会に属する諸民族や様々な集団の「歴史」が誰によって誰のために書かれるのか、誰がそれを取捨選択し、どのような布置を与えていくのか。書かれる側の人びとのアイデンティティの維持や主張といかなる対応関係にあるのか。本プロジェクトでは、中国南部の諸民族の事例を中心に、「歴史」が資源化されていく状況や様態を明らかにすることを課題としている。ミクロな次元での多数の「声」を拾い集めながら、マクロな文脈や外部の諸要因が関わる中で、各種の素材がハイブリッドに縫合された「歴史」が立ち上がってくる様を明らかにしていきたいと考えている。



保存される歴史的景観（2016年3月21日、中国、昆明市）。

はせがわ きよし

文教大学文学部教授。専門は文化人類学・現代中国社会論・少数民族研究。編著に『中国の民族表象—南部諸地域の人類学・歴史学的研究』（長谷川清・塚田誠之共編 風響社 2005年）、論文に「『貝葉文化』と観光開発—西双版纳における上座仏教の資源化と文化的再編」（武内房司・塚田誠之編『中国の民族文化資源—南部地域の分析から』風響社 2014年）など。